

# 保育における花を育てる体験活動の教育的意義に関する考察

——栽培活動と造形活動による総合的な活動を通して——

奥 原 球 喜

## A Discussion on the Educational Significance of the Flower Raising Activity in Childcare

—— Through Integrated Activities of Cultivating and Formative Art Activities ——

Tamaki OKUHARA

**Key words** : 人間形成 human development, やさしさ kindness, 対話 dialogue, 体験活動 hands-on activities, 造形活動 plastic art activities

### 1. 緒 言

時代の変化に伴い、保護者の価値観や生活スタイルが大きく変わってきた。勿論これらのみの原因によるものではないが、子どもたちの姿にも、大きな変化が見られるようになった。些細なことにも我慢できなくて暴力に訴える子、人と関わろうとしない子、落ち着いて物事に取り組めない子など、集団生活に馴染めない子が増えていることである。そして彼らの言動によって、集団全体の秩序が乱されて保育園や幼稚園生活が円滑に行われないう状況が出てくるなど、事態は深刻である。そんな子どもたちの実態は小学校・中学校にも持ち越され、小学校入学時より授業中に机に向かうことができなくて、教室全体が騒々しく、授業がスムーズに行われないう事態を起こしたり、更に様々な要因が重なって、年齢を追う毎に深刻ないじめ問題等へと発展したりすることが少なくない。

広島市教育委員会が平成20年に実施した「規範性を育むための教材・活動プログラムの開発にかかわる意識実態調査」<sup>1)</sup>によると、「学校や学級の行事に前向きに取り組もうとしない」ことをいけないことだとあまり思わない中学生が22.8%、「電車やバスの中で携帯電話で話している」ことを悪いと思わないのが23.3%という状況等がある。これに加えて、学校内での暴力行為も平成18年度に比べて平成22年度は小学校で1.8倍、中学校で1.4倍と増加の一途を辿っている。これが、これから親になっていく世代の規範意識の実態である。この世代を待つまでもなく、すでに今の幼児、児童の規範意識も低下してきていて、今後更に悪化するものと思われる。

このような課題に立ち向かうためには、中学生・高校生と年齢を重ねて環境が変わり、付き合う仲間集団が変わっても崩れない程の確かな規範意識、自律心、実行力等を幼児期のうちにきちんと身につけておかなければならない。豊かな人間形成を果たすための基礎は、素直で柔軟な感性と頭脳とを持ち合わせている幼児期に培われ、やがて自信を持って自らの信じる道を貫く強い意志となり、自立に向かう「生きる力」に繋がるものでなければならない。

そのような力をつけるためには、幼児期から身の周りのすべての人や物を大切に強くやさしい気持ちを育むことが大事である。その一つの方法として、自然に学ぶ体験活動を意識的にカリキュラムに組み込むことが有効なのではないかと考え、「保育における花を育てる体験活動の教育的意義について」研究を進めることとした。

### 2. 先行研究について

植物の栽培と幼児教育のかかわりについての先行研究として、残念ながら、花の栽培についての研究には出会わなかった。野菜栽培活動については、百瀬の「幼児の野菜栽培活動の効果について——保育所5歳児クラスの実践から——」と、藤田の「栽培活動と子どもの育ち——夏野菜を育てて——」の研究がある。

百瀬は野菜栽培体験活動の結果として、野菜を育てることによって子どもの自然への興味や関心を高め、更に食育や親子のコミュニケーションを高めたと述べている<sup>2)</sup>。「食べる」ことは、子どもにとって大変興味深く、栽培意欲を高めるものである。栽培を食育に繋いだ有効性を述べたこの百瀬の研究に共感した。

花も「きれいだ」と思える魅力ある素材なので、子どもたちの興味を引く手立てを工夫したら、「野菜を育てて食べる」活動と同じように「育てたい」という気持ちを高めることができるだろうと考えた。

また、藤田は「野菜は花が咲き、実がなり、熟していく過程を視覚的に見ることができる。」「そして栽培活動には、植物との対話がある。」<sup>3)</sup>と、保育において視覚的な出会いと対話が有効的であると述べている。

藤田の言う過程を視覚的に確認して育ちを感じることができるのは、花も同じである。そして藤田が有効的だと述べた「対話」を、更に能動的に引き出すための手立てを講じることの必要を感じた。

### 3. 研究の目的

#### (1) 「花を育てる」体験活動の意義

ペスタロッチが「自然こそが教師なのだ」<sup>4)</sup>と言い、フレーベルが「田畑の植物や花壇の植物を見るがいい。それらの植物が、いかに素晴らしい法則性を、いかに純粹に、内面的な、すべての部分にわたって示しているかを見るがいい。…」<sup>5)</sup>と言ったように、多くの先人が、自然の持つ教育力は人間形成に欠かせないものであると説いてきた。

平成20年3月改定の「幼稚園教育要領」では、教育の目標の一つに「生命を尊び、自然を大切に、環境の保全に寄与する態度を養うこと」<sup>6)</sup>を挙げ、「保育所保育指針」でも、「生命、自然及び社会の事象について興味や関心を育て、それらに対する豊かな心情や思考力の芽生えを培うこと」<sup>7)</sup>として、幼児期から自然に目を向ける教育や保育の推進を図ろうとしている。

また、小森も「幼児期の人間教育」の中で、「幼児の自然における人間形成とは、幼児を自然とかわらさず中で、情操を調和的に陶冶していくことである。」「自然との具体的経験を通して、ものの真価を見極めるといった感情を育てることである。」更に「動植物を愛することによって、これまで受動的な愛しか知らない幼児が他者を愛するという未知の心情を知ることになる。他者を愛するということは、自分がしてほしいことを他者にしてあげることである。」「幼児期の子どもたちは、思考の未分化から大人よりもはるかにたやすく自然と一体となって自然を人格としてとらえ、自分と同一視することができる。」<sup>8)</sup>と自然の持つ教育力の大きさを述べている。

いじめや学級崩壊が社会問題になって久しいが、子どもたちの人間形成において、自然の変化や美しさに気づいたり、生命の力強さやはかなさを感じたり、その営みの不思議さに畏敬の念を育んだりする実体験の場を多く持つようにすることがこれまで以上に必要となっているのである。

そこで、自己中心的な思考しかしてこなかった幼児の心に、他者の立場になって物事を考える心が育つことを

期待して、「慈しみながら花を育てる」活動に取り組むことにした。自らの手で植えた苗が水と陽の光を与える世話によって根付き、株を増やし、やがてたくさんの花を咲かせる過程で目にすることや、その事象に驚いたり喜んだり心配したりする心の営みが、やわらかく敏感な幼児の感性を育み、心を大きくするだろうと考えた。

なお、この一連の活動には、本学保育学科の筆者セミナーの学生が「花を育てる活動による保育」の実践力を身につけるために共に参加し、自らの卒業研究としてまとめようとしている取組でもある。

#### (2) 「花と対話すること」の意義

子どもたちの気持ちを花に寄り添わせる手立てとしては、自然と自分を同一化しやすい幼児の特性を生かして、「花と対話する」活動を意識的に組み入れることにした。花の世話をしたり花を題材とする絵を描いたりする度に、花に話しかけて対話することを勧めた。「対象と対話すること」は相手をよく見て知ることである。その物の気持ちになることである。そして心を寄せて思いやり、気持ちを繋ぐことである。自分が育てている花と対話を繰り返すことによって、自然に相手の気持ちを思いやり、大切にやるやさしさが育まれる。それはまた、自然の力に驚き、美的感覚を養い、物事をよく見たり考えたりする力を身につけることに繋がる。こうした心の営みで得た感性や能力が、その子の特性として根付くものと考えられる。それはやがて、どんな人や物でも大切にしようとする気持ちや態度に繋がるものと思われる。

#### (3) 「造形活動を組み合わせること」の意義

幼児の興味や関心は目の前の事象にあるのであって、花を植えたからといって常に花のことを考えている訳ではない。そこで「花を育てる」という活動から心が離れないように、花にかかわる造形活動を組み合わせることにした。

幼児の造形表現は自由な心の表出そのものである。思いのままの形や色で表現すること自体が楽しい活動である。その題材として、継続して育てている「花」を取り上げて花に目を向ければ、更に対話を深めてその美しさやいとおしさを心にとめることとなるだろう。表現活動を栽培活動と意図的に組み合わせることによって、子どもたちの花への興味や関心を高め、自然に幼児の目が花に向き、一層意欲的で丁寧な花の世話を繋げたいと考えた。

また、その花の世話によって見つけた事象や抱いた花への感情が、表現する絵や造形遊びに表出され、生き生きとした表現活動を行うといった相乗効果を生むこともそのねらいである。

## 4. 実 践

### (1) ねらい

#### ①幼児が身につけること

学生の支援によって幼児が花を育てる過程で、次のことを身につけることを、そのねらいとした。

- ・花の苗がきちんと根付くように植える方法を身につける。
- ・水やりや陽に当てるなど、花がよく育つよう世話をする技能と態度を身につける。
- ・一生懸命生きようとしている花の姿を見逃さず、花の気持ちになって花と対話できるようになる。

#### ②学生の課題

- ・自らが、花の苗がきちんと根付くように植える技能や花がよく育つよう世話をする実践力を身につけ、幼児に教えることができる。
- ・花の変化や対話したことなどを話題にしたり、造形表現と組み合わせたりすることによって、幼児の興味や関心が花から離れないようにする保育方法を身につける。
- ・保護者と共に保育する方法を試みる（家庭用栽培の苗を植えた鉢をプレゼントする等）。

### (2) 実施方法

「まごころ保育園」の協力を得て、9名の学生が保育園を訪問して年長児19名との交流を年間8回（4月26日～2月15日）持つことにした。学生は、幼児が花を植えたり造形活動を行ったりする際、声をかけたり活動の支援に当たったりした。学生一人が2～3名の園児に継続的に関わり、園児と信頼関係を結び、保育の実際を学ぶ機会にもした。

学生は、交流のたびに花の育ち具合を一緒に見たり世話をしたりしながら、幼児の様子を見たり気持ちを聞いたりして心の成長ぶりを見て取るよう心がけた。

### (3) 実践記録

#### 事前学習

学生は学内で、花を植える事前演習と日常の世話を継続的に行った（写真1）。幼児に教えるためには最低限身につけておかなければならない技能である。水やり等の日々の世話をし始めて抱く花への感情も、保育者としては体験してほしいことである。

#### 1回目（4月26日）

- ・園児と一緒に苗を植えた。

初対面の園児と学生は「花を植える」活動を共に行った。学生は園児と、花の世話と花に話しかけることを約束した。

- ・担当学生の顔の絵を描く。

仲良くなるために、学生の似顔絵を描く造形活動を

行った。どちらの気持ちも和み、幼児も学生も喜んでいった。

#### 2回目（5月31日）

- ・苗を植えて一ヵ月後、一緒に花の世話をを行った。

順調に花を増やしている鉢ごとに、花がらをこまめに摘み取る世話の仕方を教え、継続して世話をしよう約束した（写真2）。

- ・育てている花を描く

株が増えて花の数が多くきれいに咲いたプランターを囲んで、思い思いに絵に描いた。自分が世話をした花には特別な気持ちがこもり、絵を描くのは苦手だという園児も、学生に励まされながら楽しそうに描いて、それぞれの作品に満足していた（写真3・4・5）。本来なら「見てかく絵」はもう少し客観的に物を見ることができるようになってから扱う題材であろう。しかし、自分たちの世話で咲いた花に心を留めて、対話しながら絵を描くためによく見ることは、一層花の美しさといとおしさを感じるものと思われる。「きれいに咲いた花を丁寧に描いて、おうちの人に教えてあげよう。」と意欲づけ、印象に残る形や色を自分流に描くようにさせた。

#### 3回目（6月28日）

- ・家庭用の花をプレゼントした。

花が変化する度に見せる子どもたちの驚きの姿や花をかわいがる姿を、保護者にも見てほしい、そして子どもたちが花と共に育つ喜びを共有してほしいという学生の要望で、家庭に持ち帰る花を植えた鉢を用意することにした。「千日香」と種から育てた「プリムラ」を寄せ植えして、保護者への手紙と共に人数分手渡した（写真6）。

#### 4回目（7月26日）

- ・花の世話をした。
- ・共同制作で大きな用紙に花の絵描いた。

花の世話をした後、今回は心に残っている花を大きな一枚の用紙に思い思いに描いて「まごころ花畑」とした。学生の描いた花も加わってにぎやかな明るい花の絵になった（写真7）。

絵を描く活動では、クレパスやコンテ、マジック、水彩絵の具等のいろいろな画材を体験して表現活動を楽しむことを大事にした。

#### 5回目（8月9日）

- ・咲き残っている花の世話をした。

花の盛りを過ぎても残っている花がきれいに見えるように、枯れた花や葉っぱを取り除いてすっきりさせた。

#### 6回目（10月25日）

- ・家で育てている花の様子を園児から聞いた。
- ・大型絵本の読み聞かせをし、運動会の演技を見せてもらう交流をした。

## 7回目(11月15日)

・花をつくった。

紙、モール、紙テープなど好きな材料を使って思い思いの方法で花をつくった。様々な花が集まってかわいい花畑が出来上がった(写真8・9)。

## 8回目(2月14日, お別れ会の予定)

## 5. 結 果

毎回交流時に会う幼児の様子や、学生がそれとなく話題にして聞き取った言葉、保護者のアンケート、そして担当の保育士から教えてもらった様子等は次のようなものだった。

## &lt;幼児が花と話したこと&gt;

- ・「きれいに咲いてね。」
- ・「大きくなりますように。」
- ・「お花同士が『今日は雨だよ』と話していたよ。」
- ・「お花さん、おはよう。」
- ・「お花とお花がお話しているよ。」
- ・「今日も元気だね。」
- ・「お花がしゃべるわけないよ。」

訪問するたびに、学生の顔を見るや「たくさん咲いたよ」とか「ちょっと枯れたんよ」等、花のことを話題にして話しかけてくる幼児の姿からも、花が彼らの生活に根付いていることを知ることができた。

「花がしゃべるわけない」と言った一人の幼児は、どんな物にでも同化しやすい時期を過ぎ、分化したものの見方をする発達の途上にあるものと思われる。一人一人の違いを認めながらも、個々に違う子どもらしい感性を大事に育みたいと考えた。

## &lt;保護者の感想&gt;

- ・「お花が元気ないよ！水あげんと。」と言って心配しながら世話をしている子どもの姿をほほえましく思った。
- ・家でも多くの花を育てているが、「自分の花」というのが意欲を持たせるポイントなのだと思った。自分の花にはよく水をやっていた。
- ・春に咲くもう一種類の花はどんな花か、親子で想像して楽しみにしている。
- ・「自分がもらった花」という意識があるようで、花が咲くと大喜びしていた。
- ・時々、花のことを思い出してはベランダに見に行き、「咲いてる。咲いてる。」と喜んでいた。
- ・子どもの様子を見て、子どもの心を育てるよい活動だと思った。

## 6. 考 察

子どもたちは共に花の世話をする日を大変楽しみにして待っていてくれた。花に話しかけながら世話をしているけなげな姿、その花を題材に絵に描いたりつくったり

する造形活動の嬉々とした姿等、花を育てながら自然の営みの不思議さや偉大さに気づいて驚いたり、美しさに感動したりといった子どもたちの心動かされる場面にたびたび遭遇した。「きれいだ」「かわいい」「すごい」と感じる花を、自分たちの手で守り育てる楽しさや、世話をする花に応えてもらえるというやりがいを感じたようである。この、花を育てる体験によって、子どもたちの花に対する興味は高まり、大事にする態度が少しは育まれたと言えるだろう。このことは、やがて身の回りの事象をよく見て、他者の立場になって物事を考え、大切にする姿勢に繋がってほしいと願うものである。

ところが、教育という仕事は一つの取組だけで完結するものではなく、様々な活動が有機的に組み合わせる総合的な取組の結果であるから、本実践のみで成果の検証を行うのは無理があることも事実である。

そうは言うものの、花を媒介に行った今回の活動が、子どもたちにこのように受け入れられ、かつ楽しい活動になった要因をまとめてみると、次のようなことが挙げられる。

- ・子どもが本来大好きな「土」を相手にした活動であること。
- ・「世話をすればきれいな花が咲く」といった過程と結果が、子どもにとって分かりやすく、目に見える形となって表れること。
- ・花に興味や関心を持たせるために、本来大好きな「造形活動」を組み入れたこと。
- ・2～3人に一人の学生がついて、個別の支援ができたこと。等である。

特に今回の取組では、個別に話をしたり遊んだりしてもらえ学生と積み重ねた人間関係が、花への関心を持続させる大きな役割を果たしたと言えるだろう。

また、学生の発案で行った、家庭に持ち帰って親と共に育てた花は、約3分の1の家庭の花が「枯れた」とのことだった。このことから忙しくゆとりのない家庭生活の一端を伺うことができた。しかし、一緒に花を育てて親子のコミュニケーションを深める役を果たした家庭もあり、それらは手応えとして感じることもできた。

今後の課題としては、次のような点が挙げられる。

まず、今回は花の種類は子どもたちが決めたのではなく、与えられた物である。経費や育てやすさ等によって、自由に好きな花を何でもいいということにはならないまでも、選択の機会を与えられることによって「自分たちの花」という意識をより強く持ち、育てる意欲も高まるものと思われるので、今後は、「選ぶ」場面を用意して一層教育効果を高めたいものだと考える。

また、咲いた花を摘んで一輪挿しに活けて園舎の中を飾る活動を加えたら、今回よりもより能動的に花を育てるであろうし、自ら美しい環境を整える態度に進展するであろう。

小さい命を守り育てるという幼児期の体験活動を、更に計画的に組み入れて、彼らの人格形成に寄与するための自然との関わり方の研究を更に深めていきたいと考えている。

最後に、本研究のための「まごころ保育園」の協力に心より感謝申し上げたい。

### 要 約

幼児期に、身近な自然に関わり、親しむことは、人間形成の根源をなすことだと言われている。

そこで、保育園児と学生と一緒に「花を育てる活動」を行った。その際、より深く関わる手立てとして、「花と対話すること」を勧めた。また、花への興味や関心を高めるために、造形表現活動を組み入れた。これらの手立てによって、花へ寄せる思いがより深まったと言える。

この、花を育てる体験が、自分以外の人や物を大切に

する心を育む一助になるものと考えられる。

### 引 用 文 献

- 1) 広島市教育委員会編：規範性をはぐくむための教材・活動プログラムの開発に係る意識実態調査について，3-4(2010)
- 2) 百瀬ユカリ：幼児の野菜栽培活動の効果について——保育所5歳児クラスの実践から——，19(2012) 静岡福祉大学保育文化研究会
- 3) 藤田裕之：栽培活動と子どもの育ち——夏野菜を育てて——，ほいくる，2012夏，16(2012)
- 4) 長尾十三二，福田 弘著：人と思想 ペスタロッチ，44-45(1991)，清水書院
- 5) 荘司雅子：フレーベル「人間教育」入門，35(1973)，明治図書出版
- 6) 文部科学省：幼稚園教育要領 1(2008)
- 7) 厚生労働省：保育所保育指針 2(2008)
- 8) 小森健吉・吉岡 剛編：幼児期の人間教育，159-160(1988)，法律文化社

### Summary

Being involved in and becoming familiar with the close nature in our early childhood is said to fundamentally affect our human character formation. In view of this, nursery school children and student have jointly engaged themselves in the “raising flowers” activity continuously.

As one of the methods to familiarize themselves, we have encouraged them to “make conversations with flowers”. Also, formative expression activities were introduced to the project in order to raise children’s interest in flowers. Through these measures, the children seem to be more caring towards flowers than before. The flower-raising experience may help nurturing a spirit, which respects other people and things.

写真資料



写真1 学園の花を植える学生



写真2 「こうして花がらを取るのよ。」



写真3 「かわいい花だね。」



写真4 「ぼくの花は黄色だったよ。」



写真5 「かわいい花が咲いてうれしいな。」



写真6 「家で大事に育ててね。」



写真7 全員で一枚の絵に挑戦



写真8 「今日は花をつくりましょう。」



写真9 「ぼくたちの花畑です。」